

アジア歴史資料センター設立 10 周年記念シンポジウム概要

2011 年 11 月 18 日、早稲田大学小野記念講堂において、アジア歴史資料センター設立 10 周年記念シンポジウム「アジア歴史 10 周年の回顧と展望」が以下のスケジュールで開催され、157 名の来場者がありました。

14 : 30—14 : 45 開会式

開会挨拶 高山正也 国立公文書館館長
挨拶 園田康博 内閣府大臣政務官
来賓祝辞 福田康夫 元内閣総理大臣

14 : 45—15 : 00 基調講演

ドナルド・キーン コロンビア大学名誉教授

15 : 00—17 : 50 パネルディスカッション

コーディネーター 平野健一郎 アジ歴センター長
パネリスト

ウィリー・ヴァンドゥワラ

ルーヴァン・カトリック大学文学部教授（ベルギー）

歩平 中国社会科学院近代史研究所研究員・前所長（中国）

李相燦 ソウル国立大学国史学科教授（韓国）

川島真 東京大学大学院総合文化研究科准教授（日本）

シンポジウムの概要は以下のとおりです。

1. 開会式

開会式冒頭、高山正也・国立公文書館館長から、次の挨拶がありました。

アジア歴史資料センターは過去 10 年間、デジタルアーカイブの先駆として存在し続けた。本年 4 月には「公文書等の管理に関する法律」が施行されたこともあり、この記念すべき年に 10 周年記念シンポジウムが開催されたことは誠に意義深い。今後はアジア歴史資料センターが量的のみならず質的にも大いに発展していくよう期待する。

続いて、園田康博・内閣府大臣政務官から、次の挨拶がありました。

これまで公文書管理に携わってこられた福田元総理、上川元公文書管理担当大臣をはじめとする関係者に謝意を申し上げる。そして、設立から今日までの10年間において着実に進捗を進めてきた方々の取組に心から感謝申し上げる。また、私ごとではあるが、故郷の岐阜について検索したとき、廃藩置県や市町村合併、さらには鉄道敷設や治水事業など、様々な資料がすぐに閲覧でき、アジ歴の存在は資料の公開という意味でも大変重要であると再認識した。アジア歴史資料は若い世代、次の世代にとっても貴重なものであり、ぜひ広く御利用いただきたい。また、皆様には、長期にわたって歴史文書・公文書が保存・公開できるようにアジ歴業務に対する支援を賜りたい。アジ歴の更なる発展を祈念するとともに、自らも尽力したい。



(園田康博内閣府大臣政務官)

来賓として出席された福田康夫・元内閣総理大臣からは、次の祝辞がありました。

自分（元総理）は、官房長官として、職務上アジ歴の設立に深く関わり過去10年間にわたりその成長を見てきた。アジ歴は小さな組織でありながら、質の高い膨大な業務を実施しており、正に「小さな巨人」と言えるのではないか。民主主義国家においては、国民は史実を知らなくてはならないが、アジ歴は国家の歴史を形成する記録を世界中の人々にも発信している。また、日本にとって都合の悪い資料を世界に示すのは勇気がいることだが、世界に向かって日本がそうした取り組みを行っていることを示す上でもアジ歴の存在は重要である。アジ歴の今後については、現在の対象期間・範囲をよく考慮し、政府機関のみならず、民間の資料も公開できるような方向で進んでもらいたい。



(福田康夫元内閣総理大臣)

2. 基調講演

次に、ドナルド・キーン・コロンビア大学名誉教授から、次の基調講演がありました。

外国人の研究者にとって、日本研究には大きな困難がある。その困難は、大きく分けて二つある。一つは、日本語の読み方の問題である。一般に考えられているほど外国人が漢字を覚えることは難しくはなく、日本語の漢字の読み方を覚えることが困難なのである。中国の漢字と異なり、日本の漢字には読み方が定まっていないものが多い。特に固有名詞は法則性をまったく無視したものが少なくない。日本人は漢字そのものを重視し、漢字の音を重視していないように思われる。日本の学者は著書で



(ドナルド・キーン コロンビア大学名誉教授)

使われている漢字にふり仮名をふることの必要性を感じていないようだが、外国人研究者は英語で執筆する際、日本の人名や地名を表音文字で表記しなければならず、読み方が分からないことはかなりのストレスであり、それを調べるのに多くの労力を費やさざるを得ない。

もう一つの問題は、日本の書籍の索引が不十分なことである。例えば、自著『明治天皇』を執筆する際、アーネスト・サトウや横井小楠、牧野伸顕らが明治天皇の容姿をどのように描写したかを調べようとしたが、日本で編纂された書籍の中では、「明治天皇」という固有名詞でしか索引に載っていないため、どこを調べればいいのか分からなかった。昔の学者は時間があつたかもしれないが、現代の学者は書物をすべて読むほど暇ではなく、やはり時間の浪費となる。人名や地名だけの索引は意味がない。自著『明治天皇』では、索引は40ページに及ぶ。日本人は漢字の読みや索引など書籍や資料の情報について、もっと重要性を認識してほしい。

3. パネルディスカッション「デジタル・アーカイブが変える歴史研究」

基調講演後、ベルギー、中国、韓国、日本の研究者によるパネルディスカッションが開催されました。同パネルでは、研究面におけるアジ歴の役割と貢献、今後の方向性や課題について討論が行われました。

質問1：パネリストのアジ歴活用法

(川島准教授) 何か思いついたときには、まずアジ歴で資料を検索する。

(ヴァンドゥワラ教授) 万国博覧会の歴史を研究した際、アジ歴で公文書館と外史の資料を利用した。

(歩平前所長) 毒ガス戦や化学戦を研究したときアジ歴が非常に役立った。

(李相燦教授) 自らが奎章閣資料のデジタル化に関わった経験から、アジ歴の資料だけでなく、インターネットサービスからも示唆を得た。

質問2：過去10年間に如何なる研究分野でアジ歴を活用してきたか

(歩平前所長) 満洲事変80周年及び辛亥革命100周年の共同研究では、日本語資料はほぼ100%アジ歴を利用していた。

(ヴァンドゥワラ教授) 日本近代の金融政策を研究しているグループは多くのアジ歴資料を引用している。

(川島准教授) 義和団事件関係の資料を外交史料館で探したが見つからず、アジ歴データベースの検索を利用することによって海軍関係資料の中にあることが発見できた。アジ歴の横断検索は非常に有益である。

また、台湾においては、従来総督府文書は利用するが日本の中央政府の公文書は利用しないとの傾向があったが、アジ歴の存在がそうした傾向に変化をもたらしている。

質問3：アジ歴事業が対日観に変化をもたらしたか

(李相燦教授) 韓国ではアジ歴の利用者は近代史研究者のみであり、一般人の対日観への影響はないと思うが、研究者の対日意識は変わった。

(歩平前所長) 中国の研究者はかつて日本政府が資料を隠匿していると考えていたが、アジ歴の存在により、そうした考え方が変わり、対日関係に大きな影響があった。南京の人民解放軍関係の雑誌でも、アジ歴は現代軍事史研究にとって非常に重要な存在であると評価されている。

質問4：アジ歴をより広く利用してもらうためには

(川島准教授) 資料の網羅性を上げ、検索の精度を高める必要がある。特に、先頭 300 字が最適かどうかは検討の余地がある。例えば、中国の外交文書では、冒頭はすべて受領した文書の内容の反復となっている。やはり全文テキスト化が望ましい。

(歩平前所長) 資料件名ごとに中国語の解説をつけると良い。

(李相燦教授) 資料全文のテキスト化及び外国語への翻訳が望ましい。

(ヴァンドゥワラ教授) ヨーロッパにおいては日本研究者のみならず、中国研究者への広報も有効である。

質問5：アジ歴は今後どのような方向を目指すべきか

(ヴァンドゥワラ教授) 海外に保存されている日本語資料との横断検索及び日本学研究を行っている海外機関とのリンクを検討してはどうか。

(川島准教授) 3 館以外や公文書以外の資料及び戦後資料の公開を目指す。海外とのリンクについては、文化侵略との疑念を持たれないような双方向性を保ったリンクを心掛けるべき。

(歩平前所長) アジ歴が永続するよう努力すべき。

(李相燦教授) 画像資料の全般的なテキスト化を行うべし。また、アジア主義を連想させる「アジア歴史資料センター」という名称を再検討すべし。

パネルディスカッションの最後には会場から質問も出されました。質問の一つは、アジ歴の特別展において、特定の資料解釈を示しているようだが、アジ歴としてはどう考えているかという内容で、平野センター長から、特別展については特定の歴史観を提示しないようなテーマを選択し、解説は資料事実の解説に限定するなど苦心しているが、近隣諸国との歴史認識問題が一定の前進を見れば、より重要なテーマも扱えるのではないかとの回答がなされました。

こうした質疑応答が活発に行われ、シンポジウムは盛会のうちに閉幕しました。

(以上)